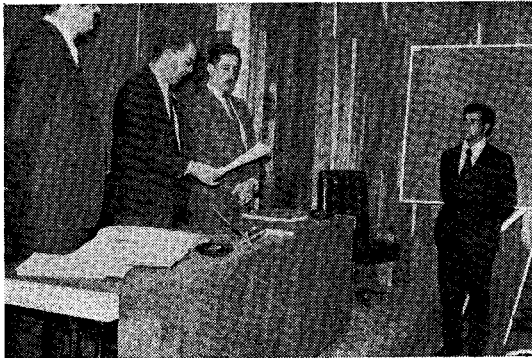


⑥ メキシコ

北島昭一*

1. インヘニエロの誕生

メキシコで「山田さん」と呼びかけるとき、ご存知のごとく、“Señor YAMADA”となる。だが山田さんが大学の工学部を卒業していると、人びとは“Ingeniero YAMADA”と呼びかけ、彼もにこにこして挨拶を返す。“セニョール”よりも“インヘニエロ”のほうが尊敬の念がこめられているからだ。ちょうど、他の国で“ドクター山田”のほうが“ミスター山田”よりも敬意がこめられているように、日本の工学士はとにかく大学工学部を卒業すれば全員に与えられるが、メキシコの場合は多少異なっている。工学部を卒業し、就職してからあるテーマにつき勉強し、レポートにまとめあげ、教授会に提出し、公開審査会をパスしてようやく“インヘニエロ”が授与される。言いかえると、卒業論文審査が大がかりになり、卒業と分離されたようなものといえるかもしれない。卒業数か月後にこの資格を得る人もあれば、数年後により早く獲得する人もあり、また、途中で断念する人もある。医師が“ドクトル”と呼ばれるのごとく、“インヘニエロ”も高度の知識と技術を持った有能な技術者に対する尊称であり、人生の階段を人よりも速く、高く昇ってゆく<急行券>でもある。事実、政界、官界、実業界の各分野において、多数のインヘニエロが活躍して



インヘニエロの誕生

* 工博 運輸省第四港湾建設局 先任港湾工事検査官

いる。したがって、公開審査会で教授たちよりインヘニエロの資格を与えられた瞬間、本人は喜色満面の微笑を浮かべ得意となり、公開審査会を傍聴していた家族、友人一同も大喜びし歓声をあげる。そして、その夜は、家族、友人すべてが集まって、歌い、飲み、食べて深夜まで祝賀パーティーが繰り上げられる。

ラテン系の人びとの昼食は遅く、早い人びとでも午後1時過ぎから始め、人によって3時すぎから始める場合も多い。彼らの食事体系は昼食中心であるから、昼食を楽しみながらとれるように昼休み時間は2時間ないし3時間と長く、また、たいていの人びとは家族と揃って食事を楽しむため帰宅し、家族団らんのときを過ごすのを常としている。このような雰囲気なので、昼食後の出勤は一時帰宅後の再出勤とは異なった気分となるせいか、昼食前の勤務先とは異なったオフィスに出勤する技術者も多い。例えば、午前中は大学工学部で議義していた教授が、午後は自分で経営しているコンサルタント会社で執務するなど。私は国際協力事業団派遣の専門家としてメキシコ海事省海洋構造物局に勤務していたが、穀物埠頭の施設配置計画および施設の実施設設計を受注したメキシコのコンサルタントと何回も打合せを行った。そしてこのなかで、鉄道担当のエンジニアと話し合ったこともあった。土質力学、構造関係の技術者との打合せは昼間のときも夜間の場合もあったが、鉄道担当者との打合せはいつも夜であった。打合せの後雑談したおり、彼らがメキシコ国鉄の中堅技術者であることがわかった。このような仕組みは、コンサルタントにとっても、また、そこで働く技術者にとっても都合のよいものなのかもしれない。コンサルタントとしては自己の業務に関連あるあらゆる分野をカバーするように数多くの専門家を常時雇用することなく、必要に応じて、必要な人材をそれぞれの専門機関から借用することができるので、最新の技術を身につけ、また、常に磨いている専門家から、一番ホットな知識を手軽に利用でき、発注者に満足できる技術を提供できる。また、技術者にとっても、自分の技術を高価に売れるので、これまた便利な仕組みといえる。

2. メキシコ式猛烈人間のこと

メキシコ滞在中、メキシコ式猛烈人間と知り合った。彼は数年前に大学を卒業した土木技師であり、交際のテクニックがとてもすばらしい人間であった。彼の定常生活は、朝8時から午後3時までの海事省海洋構造局計画課で若手技師として勤務し、午後5時から9時までの間はコンサルタントの計画部門で働いていた。週に2日はこの定常勤務のほかにも市郊外にある大学で朝7時から1時半の講義を受け持っているとのことであった。私も唾

然として彼の講義を聞にくる学生の数を尋ねるのを忘れてしまったが……。その後、彼は郷里の親戚らの紹介により、現大統領夫人の兄弟であり生活物資補給公団 CO-NASPO の開発部長の技術担当の秘書となり、朝 9 時から夜 11 時まで働き続けており、それでもなお、早朝の講義も続けているとのことである。ちなみに、この猛烈メキシコ人に公団が支払っている給与は約 1000 ドルとのことである。「なぜ、そんなに長時間働くのか」との問いに対して、「メキシコには有能な人間は少ない。だから有能な人びとは各人が多方面で長時間働かなければならないのだ」と答えていたが……。

3. よく働くエリートたち

勤務の内容は別として、メキシコの技術者は長時間働いている。例えば中央官庁の課長レベルは朝 8 時から午後 3 時まで、そして午後 6 時から 9 時まで、毎日計 10 時間、自分のオフィスか別のオフィスで執務している。局長ともなると大臣、ときによって大統領の呼出しが頻繁となり、彼らがメキシコ市にいる場合には土曜、日曜の出勤も覚悟せねばならず、また、事実出勤しているとのことである（メキシコでは国家公務員も週休 2 日制である）。この局長の月給が 2500 ドル、課長レベルが 1500 ドルから 2000 ドルとのことである。日本の土木技術者の目からみると、海洋構造物局の設計課長が部下と上屋の壁の配筋について半日もの間議論を続けるなど、彼らの仕事の内容、言いかえると技術能力はかなり低いものに映る。その一例として、ある港の棧橋の床版とこれを支えている杭との結合部の施工があげられる。設計者は床版を補剛する格子桁の交点を杭が支持することを期待しており、設計図面でも杭の中心と格子桁の中心線の交点は一致しているにもかかわらず、現実の棧橋では設計図面どおり施工されている結合部は全体の 1 割程度であり、曲がりなりにでも床版の荷重が大きな偏心モーメントを起こさず杭に伝達される接合部は全体の半分、残りの接合部では、杭頭、桁いずれにも設計者が算定している値を大幅に上回る応力が発生する危険な状態にあ

り、このなかには径 50 cm の杭が厚さ 40 cm の桁から全くはずれてしまっているようなものも多数あるなど、惨胆たる施工ぶりである。このような危険な施工を行う施工業者、また平然とこれを検収した発注者の技術レベルの低さにまず驚くが、この欠陥棧橋の指適を受けても平然と聞き流す中央官庁の設計課長の態度にも驚いた。ことの重要性を理解できなかったのか、地方の技術者の技術レベルにあきらめを感じているのか、あるいは別の理由があるのか私にはわからないが……。

4. 陽気に楽しい日々を送る人びと

いずこの国の人びとも酒を飲んで楽しむのは好きだ。日本の職場でも仕事が終わってから一同揃って盃を傾けることはよくあることだが、メキシコのオフィスでも同様で、職場の仲間の誕生日みたいな日には、仕事が終わるとすぐ机の上を片付けて、国産ブランデー、コーラ、メキシコ風つまみを机の上に並べて、オフィスの職員一同揃ってささやかなお祝いパーティーを始める。メキシコでは子供の誕生日はお祝いをするが、大人は年をとってゆくことは悲しむべきことと心得ているのか 15 才を過ぎると誕生日ではなく＜聖なる日 DIA de SANTA＞を祝うことにしている。アントニオさんの場合には聖アントニオの誕生日が彼の聖なる日となる。同僚の誕生日を知らなくても、お祝いをする日がわかる便利な習慣なのだが、お祝いにきた人びとは、ご当人と互いに肩を抱き合い背中を軽く 2, 3 回たたいてお祝いを述べる。いかめしかるべきインヘニエロと、愛らしい秘書セニョリータとの抱擁挨拶はまことにほほえましい。コーラで割ったブランデーを飲みながら、また、メキシコ風野菜サラダ、ハム、チーズなどをトルチージャ（メキシコ人にとってパンのようなトウモロコシ煎餅）で包んで食べながら罪のないことを話し合っていて笑っているメキシコ人たちは屈託がない。レストランでささやかなパーティーを開いたとき、マリアッチの音楽に浮かれて設計課長さんは女秘書さんと皆の手拍子に合わせて身振り、手振りも面白おかしく踊り始めるなど底抜けに陽気である。

マーク
は語る



東鉄工業株式会社

当社の社章は、創業時の社章のデザイ

ンが複雑であり、また他の企業の校章とまぎらわしいので、昭和 38 年に創業 20 周年を記念して改正することになり、社員から募集した数百点の作品のうちから、デザインの専門家に依頼して最終選定をしたものに若干補筆して制定したものである。

社章は社名の「TOTETSU」の頭文字の T の組合せで「工」（タクミ）を表現するとともに土木工事のツルハシ、軌道

工事のピーター、建築工事の玄能（金槍）を象形化したものである。全体を力強い円形でまとめ、人の和と社業の発展を昇りゆく太陽になぞらえており、「明るく豊かな未来を築く」という当社のモットーを表現している。

社章は社旗、社員バッジはもちろん、作業所の看板、作業服、ヘルメット、重機、車両その他印刷物、広告等、社名の筆頭に使用している。（岸本静幸・記）